

I
創立以前



第二中学校周辺の歴史と風土

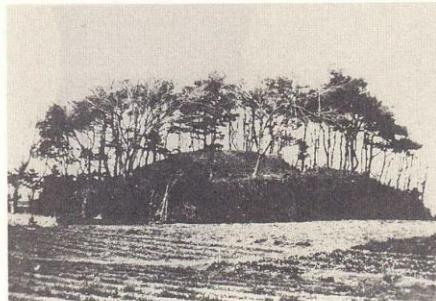
周辺の地形と景観

校歌に詠まれている須和田が丘は、現在独立した丘となっている。

丘の南側は市川駅を中心とする市街地、東は低地を隔てて第三中学校のある曾谷・宮久保の台地となる。北側はなだらかに下がつて、平川の低地に接し、やがて緑濃い国分の台地に続く。国分台は奈良・平安時代、下総国分寺が置かれた場所である。往時は国分寺の七堂伽藍が威容を誇り、朱に塗りあげられた七重塔が、木々の緑の上にひとときわ高く聳え立つて見えたことであろう。

北側の緩斜面は現在では住宅が建ちならんでいるが、麦畑が一面に広がり、青空高く雲雀が舞い上がっていた時代もあった。西方は忠靈殿の立つ須和田公園。園内には弥生時代の住居が復元されている。忠靈殿は昭和十八（一九四三）年、太鼓塚とよばれた方形の塚を削平して建てられた。忠靈塔と呼びならわされた構造物の存在感は、時代の変遷を経た今日でも不变であるかのようだ。二中卒業生にとって忠靈塔は、中学生時代の須和田が丘の思い出と重なり合う。脇に立つ忠魂碑に、アンモナイトの化石を発見した思い出を持つ人もいよう。須和田公園からさらに西方は真間山弘法寺、また千葉商科大学、和洋女子大学をはじめとする学校群の建ちならぶ真間・国府台の台地となる。

須和田台と真間・国府台との間は、現在では平坦な住宅地となっているが、自然地形としてはひと続きの台地であった。大正の中頃から戦後にかけての長期にわたる土取り工事によって、須和田台は西側の真間・国府台の台地から切り離され、さらには東側からも土取りが進み、大きく形を変えた。市川市立第二中学校は、東西を削り取られ独立丘となつた関東ローム層の台地上に立地している。



太鼓塚古墳



須和田式土器

二中の北斜面には、久保上貝塚、根郷留見貝塚という二カ所の遺跡があつた。忠靈殿の下は諸貝塚と推定される遺跡である。いずれも縄文時代前期に属しており、なだらかな斜面の周辺に、六千年ほど前に人跡をみたことがわかる。二つの貝塚は、いずれも小貝塚であり、現在は住宅地となつていて。小規模の調査で久保上貝塚からは石製耳飾り、根郷留見貝塚からは磨製石斧が発掘されている。

須和田遺跡

須和田という地名の由来はさだかではない。「スワ」は湿地帯を意味した言葉で、須和田台下の湿地帯を開発して作った水田を「スワダ」と称したという説もある。地名の根拠は別にしても弥生時代以降須和田台下の低湿地を利用した水田耕作が行われたであろうことは推定できる。

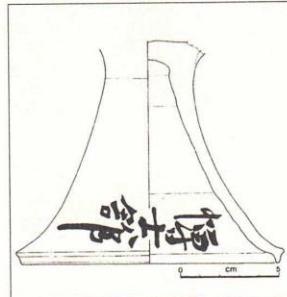
文字資料に須和田が現わるのは戦国時代の永正八（一五一）年、「下総国諏訪田」として登場する。江戸時代から明治・大正・昭和のはじめにかけては、下総国葛飾郡須和田村、東葛飾須和田村、五常村大字須和田、国分村大字須和田と移り変わり、昭和九（一九三四）年市川市に編入された。昭和二十六（一九五二）年に市川市須和田町、昭和四十一（一九六六）年に市川市須和田となり現在に至っている。

昭和七（一九三二）年、我が国の考古学界に初めて「須和田」の地名が紹介された。

数年間にわたり須和田台地の発掘調査をした杉原莊介は、須和田台地が弥生時代から奈良・平安時代まで続く壮大な古代遺跡であることを発表した。

その後に行われた発掘調査により、台地のほぼ全面に、おびただしい数の堅穴住居跡が存在することが確認され、弥生時代から特に古墳時代、さらに奈良・平安時代にかけての大集落の跡であることが裏付けられている。弥生時代の集落に付随する環濠（集落を囲む断面がV字状の堀）も発見されている。

昭和二十八（一九五三）年に忠靈塔の南側で行われた早稻田大学による発掘調査や、昭和三十一



「博士館」

(一九五六)年に校庭整備の一環として行われた発掘調査、昭和四十二(一九六七)年から三年間にわたって、北側で行われた明治大学の発掘調査を記憶している卒業生も多いことであろう。

米づくり、金属器の使用など、我が国の歴史のエポックの一つである弥生文化が関東地方に波及するのは、紀元前一〇〇年頃といわれている。須和田遺跡で出土した弥生式土器のうち、ふる手のものはこの頃のもので、「須和田式土器」と名付けられ、南関東最古の弥生式土器に位置づけられている。

下総国府

奈良時代の地方の行政区画は国・郡・里に分けられ、地方を治める役所として国府・郡衙が置かれた。下総国府は現在の国府台にあったと推定された。奈良・平安時代には須和田台地は国府台の台地とひと続きであり、国府関係の仕事にたずさわる人々の住宅地であったのであろう。

須和田と国府台・真間との間の土取りの行われた所から、「博士館」と墨書された土器も発見されているが、「国学の博士の館」の意と解されている。国学とは当時のいわば地方大学であったことからも、須和田の地は国府と密接なつながりのある土地であったことが推定できる。

真間の手児奈(名)

吾も見つ 人にも告げむ 勝鹿の 真間の手児名が 奥つき處

勝鹿の 真間の入江に うちなびく 玉藻刈りけむ 手児奈し思ほゆ 山辺 赤人

勝鹿の 真間の井見れば 立ち平し 水汲ましけむ 手児奈し思ほゆ 高橋 虫麻呂

万葉集に歌われている「真間の手児奈」は、奈良時代前期に山辺赤人や高橋虫麻呂などの役人が下総国府を訪れた時、すでに地元の伝説となっていたことから、彼女が実在したとしても、それ以前の古墳時代の人物であったと考えるほうがよさそうである。

この時代の地形等については学問的な調査は行われておらず推測の域を出ないが、いわゆる真間の入江が真間・国府台と須和田台の南側に大きく入り込んでいたと思われ、歌に詠み込まれた景観が彷彿される。現在まで、須和田遺跡からはその大半が古墳時代に属している一五〇戸を上回る堅穴住居が発掘調査されており、須和田遺跡は「手児奈」の時代の大きなムラであったわけである。

中世(鎌倉)における周辺の歴史

一一八〇年、伊豆に挙兵、石橋山の戦いに敗れた源頼朝は安房国に逃れたが、下総国の豪族千葉常胤の支援を受けて再挙を図る。常胤は下総国府を抑え、頼朝を迎えるが、この時頼朝は約半月の間、国府周辺にとどまり、武藏国を経由して鎌倉に入った。

日本の中世(武家社会)は、このようにして幕を開けるが、やがて群雄割拠の戦国時代になると、房総の地に勢力を持つ足利義明、里見義堯・義弘親子と、関東地方に大きな勢力を有していた北条氏との間で、国府台合戦が行われる。この戦いは一五三八年と一五六四年の二度にわたって行われた。

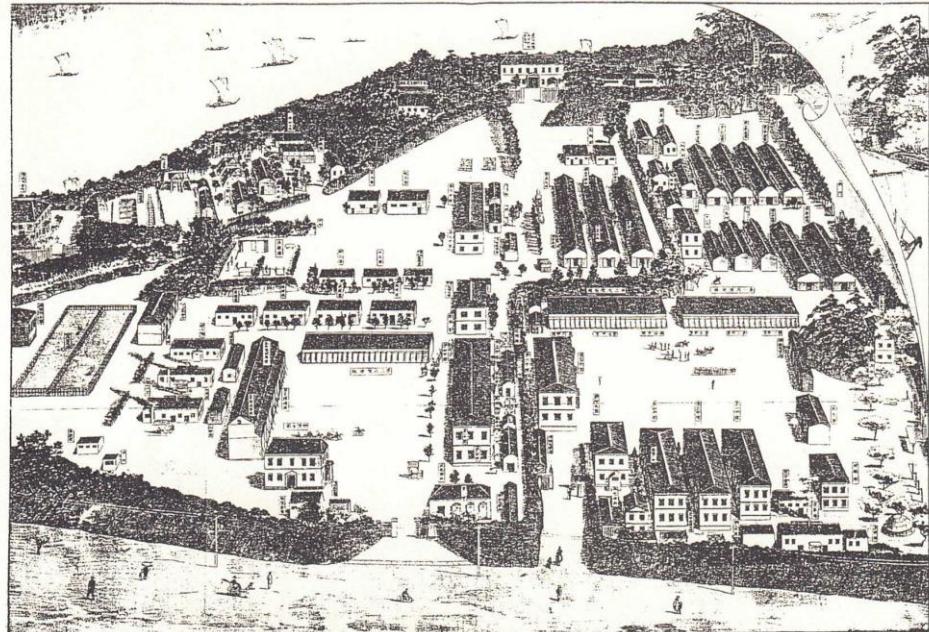
維新の市川船橋戦争

幕末の動乱後、大政奉還となり、日本は近世から近代へと歩を進めていくが、市川の地も歴史の荒波に呑まれていく。慶応三(一八六七)年の大政奉還後、維新政府軍と旧幕府側との間に一年四ヵ月余りにわたる、戊辰戦争があった。上野の山にこもる彰義隊、会津の白虎隊の戦争もこの一連である。市川船橋戦争とよばれる戦争もこの一環で、歩兵奉行の大島圭介らが新政府軍と戦った。この戦いは、戊辰戦争の最初の本格的戦争となつた。主戦場は船橋から中山・八幡・市川で、真間・国分周辺でも戦いが行われた。市川村では、住民の半分以上の一二七軒六六九人がこのために焼け出されたとされている。

陸軍教導団と野砲兵連隊

明治八(一八七五)年、文部省は国府台に大学校を設置することを決定、二十四町歩を大学用地として買い上げ、東京本郷の大学をここへ移転することとしたが実現を見なかつた。

明治十三(一八八〇)年、文部省用地は陸軍省に移管され五年後に陸軍教導団歩兵大隊が東京から



兵 執

移転した。陸軍教導団とは、陸軍の下士官養成機関で歩兵大隊・砲兵大隊・工兵中隊・騎兵中隊・そして陸軍教導団本部から成る。現在の国立国府台病院の起源である教導団病舎もこの時新築された。

明治三十二（一八九九）年十月、教導団は廃止されたが、一ヵ月後には野砲兵第十六連隊が駐屯した。以後の市川は軍隊の町であった。戦後、国府台は学園地区となるが、殆どの学校が当初は旧陸軍の施設を利用しての出発であった。

交通の発達

市内を通る現在の国道14号線は東西に延びる砂州上を走っている。奈良・平安時代の街道も同様に砂州上を通ったものと考えられている。頼朝が安房から下総国府に入った時もこの道を進んだはずである。下総国府への物資の運搬には江戸川の流れが利用されたことであろう。近世になつても、現国道14号線は主要道路であった。いわゆる佐倉道で、小岩関所—江戸川（渡し）—市川の関所—市川河岸—八幡—中山—船橋—佐倉というルートである。市川橋（木橋）がかけられ、陸路東京と結ばれるのが明治三十八（一九〇五）年一月のことになるが、鉄道が江戸川を跨いだのはもう少し早い。

明治二十七（一八九四）年七月開通の市川の教導団と佐倉の連隊を結ぶ市川—佐倉間二十五マイルの総武鉄道が、千葉県内最初の鉄道であり、続いて同年十二月、市川—本所（錦糸町）間が開通する。

京成電車は大正三（一九一四）年八月、江戸川—市川新田駅（現真間

駅）を接続した。京成電気軌道は、明治三十四（一九〇一）年以来、東京（押上）から成田へむけて、線路を延長しつつあり、これで押上から市川までが通じることになった。

市川市の誕生

昭和九（一九三四）年十一月三日、市川町・八幡町・中山町・国分村の四カ町村が合併となり、市制が施行され市川市となつた。戸数八千三百四七戸、人口四万八六九人。県内では千葉、銚子に次いで三番目、全国では百二十六番目の市である。

昭和二十四（一九四九）年、大柏村合併（現在の大町・柏井町・大野町・奉免町）、さらに昭和三十（一九五五）年、昭和三十一（一九五六）年に、行徳町、南行徳町がそれぞれ合併となり、現在の市川市の骨格が成立した。

（十期 柴山慶太）